

美術の窓(135)

清長の判続き絵の異版の解釈 その二

大和文華館館長 浅野秀剛

「向鳥春の遊歩」は、牛御前宮鳥居前の土手の上を遊歩する人々を描いた三枚続である。手前の道の左に行くのと隣接する弘福寺門前、右に行くのと三囲の土手とも呼ばれた隅田堤にぶつかる。図の左上には三囲神社の鳥居が見え、右手に隅田堤と隅田川を遠望するという構図である。右端に描かれている数寄屋造りの建物は鯉料理で有名な葛西太郎中田屋である。この図の右図にも二種の版が存在する。

一図は、女が、連れと思われぬ笠を被った女の煙草の火を煙管移しでもらっている図で、これを仮にC版(図1)と呼ぶ。もう一図は、女が左手で笠をつかんで振り返り、もう一人が若菜を摘んでいるのを見ている図で、こちらをD版(図2)と呼ぶ。確認できたものは、C版を含む三枚続が2組、D版を含む三枚続が1組、別にD版が3図、他に左図と中図が6枚ある。C版とD版はどちらが先に制作されたのか。後の版はいかなる理由で制作されたのか、というのが課題である。この作品も高津屋伊助版であるが、全ての図に版刻された「高津板」の円印があるので、版元印から前後を割り出すことはできない。

とりあえず、C版とD版の左図と中央の図の磨滅具合を比べてみる。それぞれの三枚続が後に取り合わせたものではない

とすれば、共通する左図と中央の図の磨滅具合を比較し、磨滅のより少ない方が早い版と考えることができると思うからである。ただし、現物の比較はできない。その結果、図版で見える限り、C版を含む三枚続とD版を含む三枚続の前後は判別できなかった。ただし、両者をつぶさに比較すると、C版では下方の畦道の向こう側にも草が描かれているのに対し、D版ではそれがほとんどないということ、C版では中田屋の垣が不揃いであるのに、D版では高さが整えられているということに気付いた。これを、左図と中央の図では畦道の向こう側に草がほとんど描かれていないのにC版に多いのは不自然ということでD版のように修正した。C版では中田屋の垣が不揃いであったのをD版のように修正したと考えれば、CからDという流れを想定できるが、決定的とはいえない。しかし、他にすぎかもしれないので、C版からD版に変えられたということで話を進めたい。

畦道の草や中田屋の垣では、版を変えた理由としては弱すぎるので、別の事情を考えなければならぬ。「杜若の庭」と同様に、版木の損壊などを想定しないとすれば、どのような理由が考えられるであろうか。

ここで、奇妙な符合に気付かされる。変更されたB版とD版の図様がよく似ているということ

ある。これは偶然であろうか。注目したいのは、「片手で菅笠をつかむ女」の姿形である。清長の錦絵に見出される「片手で菅笠をつかむ女」の図は、この2種の他に11図もある。

他に、天明五年刊『絵本物見岡』などにも確認できるので、版本を含めると更に事例は増えるであろう。したがって、清長は「杜若の庭」と「向鳥春の遊歩」の右の図を変えるに際し、手慣れた得意の図様にしたといえるであろう。

それでは、清長と版元は、「向鳥春の遊歩」の右の図を、何故D版すなわち「片手で菅笠をつかむ女」と摘草する女に変えたのであろうか。

ここで、歌川豊春筆の肉筆画「向鳥行楽図」(絹本着色一幅、ボストン美術館蔵、図3)を見ていただきたい。一見して、清長の「向鳥春の遊歩」と同じ場所から同じ方向を見て、同じような情景を描いた作品と分かる。違いを探せば、豊春の作品が少し隅田堤よりに設定されていて三囲神社が描かれていないこと、花見風俗であり男の酔人も描かれていることくらいであろう。構図以外で最も類似するのは、煙管移しで火をもらう二人の女と小僧の姿形である。一方を左右反転するとほとんどそのまま重なる。ごく小さいが、中田屋から左方を見る男の姿形も似ている。

版元と清長は、煙管移しで火をもらう二人の女と小僧の姿形を変えるためにD版を制作したのではないであろうか。そのつ

いでに、中田屋とそこに集う人々と畦道の草の描写を変更したのではないであろうか、と思うのである。版元と清長は、「向鳥春の遊歩」の右図の二人の女と小僧の姿形が豊春の作品とあまりに似すぎたので変更したと思う。

しかし、その説には、重大な欠点がある。

第一に、そうであれば、豊春「向鳥行楽図」の方が清長「向鳥春の遊歩」より早く描かれたことになるが、それを立証できないのである。第二に、豊春「向鳥行楽図」は一般売りされた版画ではなく、(おそらく)注文制作の肉筆画である。それを清長が見る機会があり、その後、豊春側が清長の類似を問題視した、という状況があったということになる。まあ、それはあり得るとしても、当時、先行する図様を学んで(真似て)、自身の作品に取り入れることは珍しいことではない。そして咎められることでもなかったという社会状況は、多くの研究者の共通理解であろうと思う。そうであれば、豊春側は何故咎めたのであろうかという疑問が起きる。

そのような重大な欠点があるにもかかわらず、ここで取り上げたのは、版を変えるという現象に対して、どのような理由が考えられるかということ考察したからである。その理由の一つに、他の絵師の作品との類似の問題もあるのではと思ったのである。意識するしないにかかわらず、あらゆることに意味があるとすれば、版元印の形や変化、

捺す位置に至るまで何らかの意味があることになる。それらの全部を考察する力量はないが、その一部でも明らかにすることが美術史の研究者の使命だと思ふ。



図1「グラブホーン・コレクション浮世絵名品展」1995、より複写

図2 旧バレス・コレクション

図3「ボストン美術館日本美術調査図録・第2次調査」講談社、2003、より複写

季刊 美のたより No.193

平成28年 1月 6日

発行 大和文華館